
自分勝手にin my life

emanon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分勝手にin my life

【Nコード】

N4696D

【作者名】

emannon

【あらすじ】

飲みすぎた朝、自分の部屋を見ると、そこには中学生くらいの女の子。「君、誰?」「ヒドイッ!昨日は私のことを無理矢理……」
<http://emannon98.es.land.to/ori.html>こちらは、イメージ画です。よろしければ、書庫、画廊などもご覧ください。<http://emannon98.es.land.to/index.html>感想、評価などお待ちしております。
おります。

「自分勝手にIn my life」
emannon

「今回、問題となった環境ホルモンというのは、生命が自分自身で分泌するホルモンのかわりに、受容体と結合し……」

頭イタイ……、体ダルイ……、典型的な二日酔いだ……。

「体内のホルモンバランスを乱すことで……」

テレビのニュース番組か……、また、テレビつけっぱなしで寝ちやったか……。我ながら飲みすぎた、あれからどうしたっけなあ……。テレビなんかつけたかなあ……。電気代かさむなあ、消さなきゃ……。…。

ヘイタはゆっくり眼を開けた。日差しが眼にしみる、日は既にだいぶ高いようだ。昨日は遅くまで飲んでいたから、下手をするともう正午をまわっているかもしれない。

続いて、のそのそと体を起こし辺りを見回す。

どうやって買って来たかはよく覚えていないが、確かに自分の部屋だ。

ふと、自分の部屋なのに見慣れないものが眼に入った。女の子だ。長袖のＴシャツに、ジーパンを穿いている。両方とも、サイズがまるであっていない、もう一人分くらい入りそうなほどブカブカだ。髪は後ろで一つにまとめていて、腰まで届くほど長い、たぶん、中学生くらいだろう。見知らぬ女の子がヘイタの部屋で座ってテレビを見ている？

ヘイタの視線に気がつき、少女がふりかえった。

「あ、おはよ」

間の抜けた沈黙。

「君……だれ……?」

もう一回沈黙……。

「ひどいつ!」

突然、少女は顔を覆い泣き崩れた。

「……はい?」

『何が!? どうして!? どのように!?!』

「通りすがりの私にいきなりからんできて、無理やりここに連れ込んで……」

「ホワット!?」

「社長の息子だからお金はいくらでもあるって……、みんなやってることだって……」

『おれは酔った勢いでなんつーことを……』ヘイタはたぶん人生で最大の後悔をした。でも、待てよ……、たとえ酔っていたとしても、おれにそんな根性あるわけないし、今、ちゃんと服着てるし……、と考え直す。

「嘘……だよね? っていうか嘘でしょ」

「あはは、ばれた?」

先ほどまでの悲壮な雰囲気はどこへいったのやら、少女は、悪びれもせず、舌をペロリと出した。

昨日は思い返せば悪夢の夜だった。

目の前にビール、そして隣には酔っ払い……。

「おら、手が止まってんじゃんよー ほらほらー ジョッキもってぐいっといきな〜、あ、すいませ〜ん、ビールもう一本追加〜」

酔いがまわってフラフラな手が、無理やりヘイタにジョッキを握らせる。

「いや、おれは明日の授業が……」

「あん? やかましい! アタシだって講義くらいあるよお。アタ

シに飲ませて自分だけシラフで居ようたってそうはいかないって
えの」

「なにが飲ませてだよ、自分で引つ張ってきて、そっちが飲ませて
るのにさ、この酔っ払いが……」

横から腕が伸び、ヘイタの首に巻きついた。

「アタシは酔ってない！ 全然シラフよあ？ シ、ラ、フ！」

腕に力がこもる。片手で頭をロックすることも忘れない。酔っ払っ
ているせいか普段からそうなのか、かなり本気で絞めているようだ。
「ギブ！ギブアップ！ わーかった、わかったから！ 飲むよ、飲
みます！」

「ん、わかればよろしい」

隣にいる酔っ払い カオルはヘイタの幼馴染だった。

「大体、アンタさあ。なんで落ちんのよ、成績そのものはアンタ
の方がよかったのにさ」

今年の春、同じ大学を受験したのだが、カオルは無事に現役合格を
果たしたのに対し、ヘイタは滑ってしまい、同市内で浪人生活だっ
た。

「そりゃ、俺も正直言っておかしいと思うし、納得できないけどさ、
落ちちゃったものは仕方ないじゃん、考えてもしょうがないって」

「はあ？そういう考え方だから落ちんのよ。落ちたら自殺考えるく
らいなノリでギリギリ勉強しろってえの」

「いや、ノリで自殺するのもどうか、と思うのですが……」

「四の五のゆうなってる、とにかく、あたし、二年も待つのは嫌だ
からね、今年は絶対合格しなさいよ」

「いや、そういうことなら、飲みなんて誘わないで勉強させて欲し
いんですけど……」

「ん、今度はお花畑まで行きたいの、それともその先までいつ
てみる？」

カオルの腕が再びヘイタの首筋に巻きついた。しかも、今度は容
赦なく動脈を圧迫している。カオルの目は完全にすわり、冗談抜き

に、そのまま絞め落としてしまいそうな雰囲気で力を込める。

「ちよつ、すいません、ごめんなさい！なんでもないです！」

「あん？ごめんですんだら警察は要らないって言葉知ってる？ ま、いいわ。イツキ一回で許してあげる すみませ〜ん、ビール、大ジヨッキ二つおねがいしま〜す！」

「もうやめようって言うてるのに……」

ヘイタはビールが苦手だ。第一に苦いし、ネットリしている泡も嫌いだ。ゲップをしたとき、出なくていいもの、内容物まで出てしまひそうになる。

「お待たせしました。大ジヨッキ二つになります」

店員がバケツのようなジヨッキになみなみと注がれたビールを持ってきた。それはヘイタには黄金色の悪魔に見えた。

ヘイタはカオルの方を見た。すでに、ジヨッキを持って構えている、もうどうしようもない。いつもこれで後悔しているが、わかっていてもパターンにはまってしまふ。

「んじゃ、かんぱあ〜い」

ジヨッキが音をたててぶつけられ、各々の口に運ばれる。

カオルは文字通り、一息にジヨッキを開けたが、ヘイタは苦味と臭いに顔をしかめながら四苦八苦する。見ているのが切なくなるほど苦しそうだ。それでもなんとか飲み干す。

不意に視界がグラリと揺れた。眼を開くのがつらい。ヘイタは、そんなに酒に弱いほうではないが、さすがにバケツのようなジヨッキをイツキ飲みすればそうなるのは当然だ。

「ヘータあ。なに酔った真似してんのよ〜」

ヘイタは揺れる視界でカオルをみた。ジヨッキを持ったまま机に突っ伏している。危険な体制だ。

「……へえたあ〜……」

そういい残し、彼女は夢の世界へ旅立ってしまった。

「おい、カオル！起きろって……」

呼びかけてもまるで屍のように反応が無い。完全にノックアウトさ

れてしまったようだ。

「だから言ったのに」

ヘイタはこれからやらなければならない、カオルを家まで送り届けるといふ重労働を想い、深いため息をついた。

「どっせーい」

ようやくカオルのアパートに着いたヘイタは、肩を貸していたカオルを玄関に座らせた。カオルは未だに夢の世界から帰ってこない。

「カオル、起きろー」

「んあー」

カオルは、起きてるんだか、寝てるんだか、よくわからないような声で返事をした。 全く……。

「おれはあ！ かえるからあ！ 鍵い！ しめろよあ！」

「んー、わかったー」

酔っ払いにも聞こえるように耳元でどなつて、カオルのアパートをでた。外に出ると、重労働でかいた汗が冷えて寒かった。もう四月も終盤を過ぎるが、夜はまだ冷える。

カチリと鍵が閉まる音が鳴つたのを確認してから、自分のアパートへ向かつて歩き出した。

今日のようなことは一度や二度ではなかった。というか、カオルと飲むときは大体このパターンである。週末になるといきなり飲みに誘われ、こっちの都合も関係なしに連れて行かれる。そして、ヘイタが浪人したことへの文句だの、性格に関する文句だのを散々聞かされたあげくに、勝手につぶれてしまうのだ。こっちの都合も考えて欲しいものだ、と思う。

「っていうか、なんで浪人した自分が文句いわれなきゃいけないんだよー、性格にしたって、そういう性格なんだからしょうがないじゃないかよー」

そうばやいてみる。けれど、カオルと一緒に遊ぶのもいいな、と思
ってノコノコとついていってしまう自分が情けない。性格はどうか
知らないが、黙っていれば結構可愛いし、プロポーシヨンもいい。
誘われたらついていきたくなるのも当然だろうと思う。

「どうでもいいけど、疲れたな」

適当に休める公園に向かい、ちよつと休んでいくつもりでベンチ
に腰を下ろした。多少肌寒いが、酒が入っているせいか、あまり気
にならない。体が重かった、座っていたのが段々と重力にひかれ、
ベンチに横になる。ヘイタにこのまま夜を明かすつもりはなかった
が、こういう場合、一度横になったら後は不可抗力である。睡魔が
誘うまま、夢の世界に落ちていった。

「おきてくださーい、こんなトコで寝ないでくださいよー」

ヘイタは、自分に対して向けられたであろう声を聞き、ぼんやり
と眼を開けた。少女が顔を覗き込んでいるのが見える。

「よかった、何度呼びかけても起きないから、死んじゃってるか
と思いましたよ」

少女は、夜の公園には不似合いな能天気な明るい声で言った。

「ん、あ、起こしてくれたん？　ありがとう」

「いえいえ、目の前で凍死とかされると寝覚めが悪いんで起こし
ただけですよ」

何気に酷いことを言う少女である。

「結構笑えない冗談だね、じゃ、おやすみ」

頑張って起こしてくれた少女の厚意を受け流し、ヘイタは再び寝息
をたて始めた。完全に泥酔モードだ。

「ちよつと、ちよつと、せつかく起こしたのに寝ないでください！

っていつか、寝るなー！」

少女は耳元で叫んだり、頬をつねったりといろいろしてみるのが、ヘ
イタはうめき声をあげるばかりで、一向に起きる気配はない。

「まったく……、しょうがないな」

少女は夜の公園に一人ぼやいた。

「で、そのままほっぽりとくわけにいかないから、住所とかわかるものないかな」 と思つて、手荷物あさったら、電気代の請求書が入つてて、ちょうどこの住所が書いてあつたから、頑張つて引きずつてきたんです」

「あゝ、なんか言われてみれば、そんなこともあつたような気がするなあ。あまりよく覚えてないけど」

ヘイタは台所で卵焼きをひっくり返しながら言つた。手首のスナツプを上手く使い、なかなか手馴れた手つきだ。

浪人中のヘイタがそんなに高い部屋を借りられるはずもなく、六畳一間の安っぽい部屋だ。それでも一応料理のできるスペースはあつた。

「これからは飲みすぎには気をつけたほうがいいですよ？ 凍死したくなければ」

「しょうがないだろ、飲んだんじゃなくて無理やり飲まされたんだから……、よし、できたつと……」

ヘイタが台所からリビング兼寝室に戻ってきた。お盆に二人分の朝食が載っている。献立は炊きたてご飯、卵焼き、味噌汁である。

「あ、わたしの分も？」

「うん、死の淵から救つてもらつたお礼にはささやかなものだけど、どうぞめしあがれ」

「そういうことなら遠慮なく……」

少女は、手を合わせて「いただきます」とやってから、卵焼きを口に運んだ。外はカリッと香ばしく焼いてあるが、中はあくまでふんわりとしている。味付けも絶妙で、しつこくないのに、きちんと自己主張をしている。これを一言で言うなら……

「おいしい！」

「ん、そういつてもらえると、作った甲斐があるってもんだねえ」

限られた生活費でそれなりにおいしいものを食べようと思ったら自分で作るのが一番いい方法である。味噌汁はインスタントではなく、ちゃんとダシをとったものだし、ご飯も、炊くときに蜂蜜（そうするとおいしく炊き上がるのだ）を入れたり、いろいろと工夫がこらしてあった。

少女は、よほどお腹がすいているのか、よほどおいしいのか、それともその両方が、一心不乱にハシを動かす。ヘイタはそれをみて思わず笑みを漏らした。

「あ、すいません、お腹空いてたんで」

少女がヘイタの視線に気づき、顔を赤くした。

「あ、いや、ただ、自分が作ったのを人がおいしそうに食べてくれるのってうれしいもんだな、ってさ、まあ、主夫の喜びってやつ？」

そのまま見ているのも気まずくなり、ヘイタは自分の朝食にハシをつけ始める。

しばらく、ハシと茶碗が触れる音が流れる。

「そういえばさあ……」

ヘイタは少女が食べ終わるのを見計らい、声をかけた。

「はい？」

「助けてくれたのはありがたく思うんだけど、男の家に外泊とかして親御サンとか大丈夫なん？」

少女は、少し考えるようなそぶりを見せ、次に数学の問題が解けない受験生のように頭を抱えた。

「……うーん、どうなんでしょ……？」

「そもそも、あんな時間に、公園なんかぶらついてるのも、危ないと思うんだけど……、もしかして家出でもした？」

「そう言われてみると、そうかもしれないかな」とか……」

「いや、そういう微妙な言い方されても……」

「なんていうか、そういうこと何にも思い出せないんですよ」

「え！？それってもしかして記憶喪失ってやつ……？」

「言いにくいんですけど、たぶん、そこかなって」

照れくさげに、鼻の頭をかきながら少女は答えた。記憶がない割にはのんびりしてるというか、危機感がないというか……。

「いやいや、お嬢さん、もっと深刻に考えようって……」

「そんなこといわれたって、思い出せないものは思い出せないしい、だったら、頭使っただけ疲れるじゃないですか」

ホントにノウテンキである。

「いやさあ、例えば、今日どこで寝るかとか、ご飯はどうするか、とか……」

「うーん、そうですねえ……、どうしましょう？」

「……今までどうしてたの……？」

「寝場所は駅とか公園とかでなんとかありますよ。人間、案外どこでも寝れるんです。警察とか補導員とかから隠れるのがめんどくさいですけど……。ご飯も、無一文ってわけじゃないんで、贅沢しなければ、もうしばらくは大丈夫かなって」

そんなトコで寝てたら、変質者に誘拐監禁されるぞ、とか、「もうしばらく」は大丈夫って、「もうしばらく」が過ぎたらどうするの、とかツツコミ所は山ほどあったが、何を言っても無駄だろう。とヘイタは思った。　ん？そういえば……

「なんで警察に行かないの？ 搜索願でも見れば、自分の身元がわかるかもしれないし、そうじゃなくても保護くらいはしてくれるんじゃないの？」

「警察は嫌いなんです」

「へ？　なんで？」

「さあ？　なんといいっても記憶喪失ですから、その理由もわかりません。嫌いなものは嫌いなんです」

『いや……、まあ、そうだけど……』その台詞は口に出さずに飲み込んだ。

「ところでお兄さん」

少女は声のトーンを変えて言った。

「わたしより重い体を、ここまで頑張つて運んで、見返りが朝食だけつていうのはひどいですよね」

「え？ どういうこと？」

「渡る世間は金次第、地獄の沙汰は鬼ばかり……つて、ここまで言えはわかりますよね、三枚でいいですよ？」

さつきまでの軽い笑いが、小悪魔のような笑いになっている。

「いや、微妙に間違えてるつて」

「ぶつぶつ言わない。それとも、寝てるときに財布ごとつたほうがよかったですか？」

確かに、昨日の様子なら財布ごと盗られても分からなかったし、無くなっていることに気づいても、落としたと思うだろう。それを思えば、一応良心的である。

ヘイタは渋々財布に手を伸ばし、中を開いた……が、札は何も入っていなかった。昨日、出かける前に中身を確認したときには、四、五枚はあったはずだ、どうやら、金銭面でも飲みすぎたらしい。

「ごめん、無い」

「え？ 三枚つて万札じゃなくて千円札ですよ？」

「悪いけど、無いものは無い。ゴメン」

払えないことも無いが、別個にしてある光熱費、食費などの生活費から出すわけにはいかない。浪人してしまった以上、引け目を感じ、学費は無理としても生活費はバイト代で工面している。浪人生という立場上、バイトは生活できるギリギリ、その上でカオルにつき合っているのだから、残りは雀の涙である。

大体、少女が勝手にやって、勝手に金を要求しているのだから、言われたとおりに払う必要などなさそうなものだ。だが、そんな恩でも、それに報いようとするのが、良くも悪くもヘイタであった。「悪いけど、今は払えない。そうだな、一ヶ月くらいまってくれない？」

「え、一カ月後、また同じ事言われなくても限らないし……、しばらくくれられるのも嫌ですし、『明日の百より今日の五十』って言うし……」

少女は、そのまま「うーん」と考え、言った。

「わたし、しばらくここに泊まらせてもらうから、その分の宿泊代つてことで……どうですか？ 食費は別に払いますし、家事もなるべく手伝いますから」

男の部屋に、女の子が一人で泊まるというのは非常識な気がするし、いろいろと危険も感じるものなんじゃないかとヘイタは考えたが、女の子は女の子でも、誰が来るか分からない公園や、駅に平気で止まれる女の子だ。本人は別に気にしないのだろう。また、そんなところで寝るよりはヘイタのアパートのほうが安全だろう。

「そういうことなら全然かまわないよ、どうせ一人暮らしだしね。でも、悪いけど合鍵渡すのはちょっと……」

「それでかまいませんよ、寝るときに雨風、夜露と補導員がしのげれば十分です」

少女はそこで、居住まいをただし、三つ指をついた。

「ふつつかものですが、よろしく願います」

「そういえば名前、聞いてなかったね。……ってもしかして覚えてない？」

「はい、もちろん、記憶喪失ですから」

「ん」と、じゃあ、呼ぶときなんて呼べばいい？」

「あ、それでしたら、椎名ナナ、と呼んで下さい。名前聞かれたらそう名乗ることにしてるんです、名前無いといういろいろ不便ですから」

「うん、わかった、ナナちゃん……ね」

こうして、ヘイタは、このわけのわからない少女としばらく同居することとなった。

「ご馳走様でした」

六畳間の真ん中に置かれたテーブル　というよりちゃぶ台だろう　の上には空のカレー皿が二枚、仲良く置かれていた。

「ヘイタさんはカレーも上手ですね」

「いやいや、カレーなんて誰が作っても同じだよ」

ヘイタはそう言って笑いながらカレー皿を重ねると、それを持って台所に向かう。

洗面器に水を張ってつけておく、ということはず、水で軽く流し、スポンジに洗剤をたらして洗い始める。

「へえ、『つけておいて、まとめて洗う』とかやらないんですか」

「んー、やっぱり、使ったあとすぐ洗ったほうがよく落ちるしね」

洗剤の泡を水で流し、表面を指でさわる。キュツという音がするのを確認し、布巾で拭いて、食器棚に片付ける。

「結構マメなんですね」

横目で見ていたナナが感心したように言った。ヘイタが声のしたほうを見ると「親が死んでも食休み」とばかり堂々と大の字になっていた。本当に図太い少女である。

「私、一人暮らしの男性って、まず、散らかっている部屋と、たまっている洗い物を想像してました」

六畳間は小ぎれいに片付けてある。そうでなくてはいくら体が小さいとは言え、ナナが大の字になるスペースは無いだろう。

「ま、そういうものかもね。おれも始めそうだったんだけど、いろいろあってさ」

「いろいろって？」

「いろいろっていうのは、まあ、いろいろだよ」

ヘイタはそう言って苦笑する。

「ごめんなさい、ちよつと気になったものですから……」

なんとなく、聞いてはいけないことを聞いた気がして、ナナは申し訳なさそうに言った。

「いやいや、全然、そんなモンじゃないんだけど、説明するのはち

よつと恥ずかしくて、ね」

「うーん、そういう言い方されると聞きたくなりますね、ま、いいです。今日は聞かないで置きます」

ナナはそう言つて意味ありげに微笑した。

「あ、ところで、シャワー使わせてもらつて良いですか？」

カレーの鍋を洗つていたヘイタの手が一瞬止まる。

「い、いいけどさ……」

さすがに思わずしどろもどろになるヘイタ。

「何か？」

「もうちよつと自重するつていうか……、おれ、一応男だし、外で入ってきたら？入浴料くらいだせるしさ」

「あ、私、そういう気にしませんから大丈夫ですよ、んじゃ、お先に失礼しますね」

そう言つとスタスタとヘイタの後ろをすり抜け、バスルームへ入つてしまった。なかから衣擦れの音も聞こえる。ホントに脱いでいるようだ。

「おいおい……、おれは一応男だぞ……」

ヘイタはそう呆然とつぶやいた。その時

「ガラッ！」

不意にバスルームの扉が開き、下着姿のナナが顔を覗かせた。一応危ないところは隠れているが、華奢な鎖骨や首筋などが見え、ヘイタは思わずドキッとした。

「ちよつとお願ひなんですけど」

「な、何？」

「よかつたら着替え貸してもらえませんか？ ついでだから着てた服洗いたいんで」

「わ、わかつた、適当にその辺に置いとくから、そういう際どい姿をみせるな！ 一応おれだって男だぞ」

「『一応』つてところに悲しいものを感じますね、じゃ、お願いします」

あわてるヘイタをどこ吹く風と、ナナは平然と扉を閉めた。

「まったく、おれってなんでこんなに男扱いされないんだ？」

カオルのことも思い出し憮然と一人愚痴る。

「何か言いました？」

「いゝや、別に」

『もう知るもんか、どうにでもなれ』ヘイタは心の中で投げやりにつぶやいた。

寝つきがよさそうな服を適当にタンスから選び、バスタオルと一緒にバスルームの前に置き、バスルームと六畳間のドア 防寒などのためにいくら狭くてもドアがついている を閉めた。あの少女のことだ、バスルームから手を伸ばして服を着るなんてことはせず、裸のまま外に出てくるに違いない。こうしておけば、裸を見ないですむ。

ヘイタは六畳間に戻り、ベッドに寝転がるとなんとなくテレビをつけた。ドラマが移った、よくあるラブコメ物が映った。自然と、ため息が漏れた。

記憶喪失の少女がいきなり男の前に現れる。まるつきりフィクションだ。小説ではよくある手だが、まさか自分の身にそんなことが起こるとは考えたことはない。まったく、笑えたものじゃない。

そもそも、あの少女は普通の女の子ではないだろうと思う。もっとも、普通という定義をヘイタは完全に理解しているわけではないが、それにしただっておかしいところが多すぎる。自分の裸に対して無頓着過ぎるし、警察に行かないのもおかしい。普通、記憶を失くしたら警察に行っても行って捜索願でも出てないか確かめてみるのが普通だろう。なのに、警察は嫌いだと言い、それをしない。

警察を避ける、ということは何かやましいことがあるのか、元の生活に戻りたくないのか……。

ヘイタはそこまで考えたところでやめた。そんなことを考えても無意味だからだ。別にやましいことをしてようが、どこぞの家出娘で搜索願が出てようが、それはナナ個人の問題である。自分が考えるべき問題ではない、と思うからだ。とりあえず、考えるべきなのは……

「お風呂、空きましたよ」

風呂あがりのナナがリビングに入ってきた。

さつきヘイタが出しておいた服を着ている、ヘイタのものなので当然サイズはかなり大きめで袖口は何回もまくりあげられてその隙間が幼い魅力を感じさせる。また、「U」の字の胸元から片肩が丸々露出していて、華奢な鎖骨とノーブラの膨らみが見え隠れするのも理性にとって危険だ。思わず数秒視線を固定してしまう。

「どうかしました？」

「い、いや、なんでもない」

そう言つてヘイタは無理やり視線を引き剥がした。つくづく、この少女は無防備過ぎると思う。

少女は、ヘイタの隣にチョコンと座り、テレビのリモコンを手に取った。

「あ、テレビ、観てますか？」

どうやら、チャンネルを変えたいらしい。

「いや、観てないから、適当に観たいの観てよ、おれシャワー浴びるし」

「いえ、観たいのがあるつてわけじゃないんですけど、こういう安直な展開の恋愛ドラマって大嫌いなんで」

そういう、ナナの表情をふと見ると、親の仇を見るかのように歪んでいた。嫌いというより、憎しみに近い感情を持っているのかも知れない。

ヘイタが自分の顔を見つめているのに気づいたナナは、あわてたようにいつもの表情を貼り付ける。

「ゴメン、観てたわけじゃないんだけど、テレビつけるのがクセみ

たいになつてゐるから……」

「あ、いえ、こちらのほうが『すいません』です、私、好意で泊めていただくのにわがまま言っちゃって」

ナナはすまなそうに、しかし、笑いながら言った。それは一瞬見せた表情を誤魔化すように見えた。

ヘイタも誤魔化すように曖昧に笑うと、着替えを持ってバスルームに入った。

いつもはカラスの行水のヘイタだが、今日はゆっくりと湯につかる。少し落ちつきたいと思つたからだ。

いろいろあつて疲れた。なんというか、一人増えただけでこんなにも疲れる。充実すると言い換えても良いかもしれない。するものだろうか。テレビのチャンネルについてのやりとりにしても、二ヶ月前まで、実家で家族とやっていたのに、ずいぶん忘れていた気がする。

体の芯まで温まるまで湯船に浸かる。バスルームの中で体を拭き、その場で服を着る。いつもは湿気でぬれるので裸のまま外にでて着替えるのだが、今日はナナがいるのでそんなことはしない。

バスルームを出るとナナは床にうずくまるように眠っていた。ナナもいろいろあつて疲れたのだろうし、いつもはどこで眠っているのか知らないが、室内に比べて安心できる場所ではないだろう。

ナナに毛布をかけてやろうとベッドの前まで行き、思いとどまる。記憶喪失の少女が受けた苦労を想像する。ヘイタに野宿の経験は無いが、難儀なものだということくらいはわかる。こういう時くらい、ベッドをゆずろう。

ナナに近寄つた。よく寝ている、起こすのはしのび無い。さて、どうやってベッドに連れて行こうか……。

鼻の頭をかき、視線をそわそわと動かした後、頭の中で言い訳と

気合をこめてナナを抱き上げてベッドまで連れて行き、寝かせて布団をかけた。その後、ヘイタはトレーナーを一枚重ね着し、床にゴロリと寝転がった。寒いかな、と思ったが、結構暖かった。

五月の暖かい日差しが、校舎の窓から差し込んでいる。ヘイタは後ろの窓際席で、頬杖をつきながら講師が熱心に授業を続けるのを眺めていた。

ヘイタの通う予備校は業界では大手で、全国に展開されている。実家から通えるところにも校舎はあったのだが、実家の近くにあるやつはサテライト予備校というやつで、講師が直接授業を行うのではなく、講師の授業を撮影し、ビデオに録画し、それを各々で観るという形態のものだ。ヘイタ自身はべつにサテライトでもいいと思っただ。それどころか、自宅浪人でいいとさえ思っていたし、今も思っている。また、勉強は一人でするものだという考え方が持論である、人に教えられるよりも、自分で調べたほうが覚えられるからだ。実際に去年だって、同じような勉強の仕方であつて、合格できるくらいの学力はあつただ。ほんの少し、本番で失敗しないだけの「運」がたりなかっただけだ。ヘイタはそう考えている。

だが、ヘイタの父母はそんな考え方が気に入らなかつたらしく、本番で失敗したのはあくまでヘイタの勉強の仕方が悪かつたと主張し、それを叩き直すために、わざわざ、こんな遠くの校舎に入学させたのだ。

金をかけて浪人している身でこんなことを言うのもなんだが、もつとのんびり構えてもいいと思う。去年受けた模擬テストもちろん、十分なデータをとり、合否判定がかなり正確にできるものだが、「学力は十分ですよ」と言ってるんだから、気を張って、必死に勉強することもないだろう。

『でも、こういうふうな考え方していると、カオルあたりは怒るんだ

ろうな。』

講師に気づかれないうちに、あくびを一つかみ殺し、一応、ノートだけとっておく。周りの連中も自分と似たり寄ったりで、半分夢の中だ。無理もない、こんな気持ちのいい日にまじめに授業受けるなんてバカバカしい。

ちらりと時計を見てみる。まだ四十五分しかたつてない。予備校は一時間半で一コマだから、あと半分も残っている。なんで授業を受けているとこんなにも時間の進みが遅いのだろう。

ふと、なりゆきで同居することになった少女　ナナ　のことを考える。

授業の有無に関わらず、ヘイタの帰宅は遅く、十時ごろになってしまふ。親から学費だけしかもらっていないため、アルバイトをして生活費を稼がなければならぬからだ。

ナナはヘイタが帰宅とほぼ同時刻にヘイタのアパートにやってくる。たまに、遅くなることはあっても、外で待っていることはない。その後、夕食と一緒に食べる。一緒にいても、ナナがヘイタの分をちょっともらう、という感じた。外見どおり、ナナは小食だった。

そのあとは、ヘイタは勉強し、ナナは適当に時間をつぶす。朝も一緒に朝食をとり、同じ時間に家を出る。

はつきり言つて疑問だらけである。普通、記憶が無ければ、いろいろと悲嘆するだろうに、そんなそぶりはかけらも見せないし、隠しているというふうにもみえない。それに、朝から、自分が帰宅するまでいったい何をしているのだろう。記憶が無いのだから、どの学校に通っていたかなど覚えていないだろうし、下手にどこかを遊び歩いていれば、補導員に見つかり、いろいろと面倒なことになってしまふだろう。それに、あの警戒心の無さは、大問題だと思う。

以前は、公共施設で寝ていたというし、一人暮らしの男の部屋に平然と泊まる、それどころか、ベッドを譲るというヘイタに対し、居候の身で申し訳ないから、といってナナは床に寝るのだが、朝起きると、ヘイタの布団で寝ていることもある。理由を聞けば「寒い

から」と答えたが、あれが、中学生の娘のことだろうか。

警戒心とか、猜疑心とかそういうものが根本的に欠如しているのか、それとも、よっぽど信用されているのか、はたまた、ヘイタに自分を襲うなどできるはず無い。とタ力をくくっているのか……。どれが正解だとしても、いくらなんでも無防備すぎだと思う。ひよっとして誘っているのだろうか……。

「オラ、そこ！　まじめにやれ！　そんなだから去年落ちたんだろ
うが！」

ヘイタが声に驚き、顔をあげると講師が自分にチョークを向け、怒鳴っていた。少しばかり考え事に夢中になりすぎてしまったようだ。

「よっ」

ヘイタが今日の授業を受け終え、予備校のロビーに下りていくと、カオルが談話用のテーブルで待っていた。ヘイタの通う予備校では二階から授業に使う教室となっており、一回は受付と、ちょっとした休憩、談話ができるように飲み物の自販機とイスとテーブルが置いてある。

ヘイタがカオルの隣に座ると、カオルはもっていた缶コーヒーを差し出した。

「この間はごめんね。また送ってもらったみたいでさ」

「いや、別にいいよ。飲みに誘われた時点で、こうなるだろうな」とか思ってたし」

「なにそれ、まるでアタシがいつももつぶれてるみたいじゃないの」「違うの？」

「まあ、まるつきり否定できるわけじゃないけど……」

心外な、という感じで言ったカオルだったが、ヘイタに軽く切り返される。

実際、ヘイタの言っていることが正しい。少なくともヘイタと二

人で飲みに行くときは、完全につぶれているか、そうじゃなくても、ヘイタが送っていかねければならないほどの千鳥足である。

「もしかして、ヘイタ怒ってる？」

「いや、全然。いつものことだから。怒っても無駄だからあきれてただけ」

……なんだかんだ言って、結構怒っているようだ。

「まあまあ、お詫びはちゃんとするから……」

「もしかして缶コーヒーがお詫びとか言わないよね？」

「う……」

さては図星らしい。

会話だけを聞いていると、ヘイタが容赦のない攻めを展開してるようだが、飲んだときの力オルを考えれば、ちよつと仕返ししてやりたいな、というヘイタの心情もわからないものでもないだろう。

何を言っても取り付く島のもたないヘイタだったが、段々しぼんでいく力オルをみて、今回もゆるしてやろうという気になる。もっとも、それもいつものことであるが。

「ホントに反省してる？」

「もちろんです、ヘイタ様」

「男はみんな狼って知ってる？」

ヘイタは力オルが自分に手間をかけさせたことを怒っているわけではなく、男の前で無防備によいつぶれたことに対して怒っている。

ヘイタは予備校生は二種類に大別されると思う。はじめに勉強して、獣医学科とか、医学科を目指す者と、入試に失敗して進路も決まらず、半ばフリーターのように予備校に來ている者だ。後者の連中が話しているのを聞いていると（別にヘイタが盗み聞きしているわけではなく、やたらとでかい声で話しているため、嫌でも耳に入ってくるのだ）そういう「武勇伝」も多く、具体的な経験談まで話している。

「はいはい、酔いつぶれて、朝起きたら、裸で隣に知らない男が寝てた、ってやつでしょ、耳にタコできてるって」

そう言うには言うが、カオルは実際に気をつけようとは思わない。そういう考えは古臭いと思うからだ。大体、ヘイタにそんなことできるはずない。だが、ヘイタがうるさいので、一応分かっている振りをする。

「うむ、わかればよろしい」

「なんか、歳同じはずなのに、年下扱いしてない？」

「いや、別に、ただ心配なだけ。それとも、カオルは周りの人がどうなってもいいと思う？」

「たしかに、そうは思わないけど、ちょっと行きすぎになって。ヘイタの場合、オレオレ詐欺とか、ツツモタせていうの？　そういうのにすぐ引つかりそう」

「おれってそんなに騙されやすそう？」

「うん、すつごく」

「そうかなあ」

「オレオレ詐欺みたいは何百万とかは損してないとおもうけど、ちょっとした面倒は押し付けられてると思うよ」

「うーん、面倒、ねえ」

ヘイタはナナについて思い出した。自称記憶喪失の少女がいきなり居候、出来すぎた話だ。さすがのヘイタもウソ臭さを感じている。だが、本人がそういうのなら、信用してあげなければ、とも思う。でも、自分の事ながら、甘すぎるかな、という思いもある。

「話はちよつと変わる、……変わらない、かもしれないけどさ」

「なによ、その奥歯にモノが挟まったような言い方は」

「仮にさ、飲んだ朝、目が覚めたら部屋に知らない女の子がいて、酔った自分を部屋に運んでくれた子で、運んだ労働に見合うお礼を要求されて、お金が無いつていたら、今晚泊めてくれって言われたらどうする？」

「なあによ、それ？　向こうが勝手にやったことでしょう？　そんなの払う必要ないって」

「でも、『運んでもらったんだから、お礼しないと悪いよなあ』っ

て気にならない?」

「絶対ならない、大体そんなの怪しすぎるよ。知らない人でしょう? 余計なお世話って感じだって。じゃ、ヘイタは知らない人が隣に寝ていても平気なの?」

「だって、しょうがないじゃん、お金ないんだから」

「まるで、実際にそういうことがあったみたいな口ぶり……、この間飲んだ帰り?」

「違うって、あくまでも仮の話」

ヘイタはよくも悪くも正直な人間だ、人に嘘はつけない。カオルのように付き合いの長い人間はなおさらだ。もともと上手な嘘のつき方ではないし、ヘイタの顔にも嘘だと書いてある。

「……それで、家に泊めたの?」

「だから、仮の話だって」

ヘイタは、言い訳をする、が、無駄な努力だ。ますます、嘘くさく、白々しくなるだけだ。

カオルの顔が険しくなる。まるで、浮気を発見した恋人のように「あんたバカじゃないの!? 泥棒をかこつてどうすんの? 今に通帳と印鑑盗まれて取り返しがつかなくなるよ!」

「だったら、家につれてこないですぐに財布だけとっていくはずでしょ、それに記憶喪失らしいんだ」

「記憶喪失う!? そんなの嘘に決まってるじゃん」

「でも、ホントに記憶喪失だったら、ホントに困ってるはずだし…

…」

「だったら、警察にでもいけばいいじゃない」

「誰だって、警察の世話にはなりたくないだろう?」

「だからって……、それに、女の子でしょう? あんた、ロリコンなの!？」

「だって、向こうが泊めてくれっていつてきたんだし……」

「そんなことって、実際はアンタが泊めるっていったんじゃないの!？」 巢に持ち帰ったところで手を出すチャンスを狙ってるんで

しょ！」

「だから違うつて……」

「嘘つかないでよ！」

「いい加減にしてくれ!!」

ヘイタがついに声を荒げた。呆然とするカオル。たぶん、なじみのカオルにさえ初めてだ、ヘイタがここまで声を荒げるのは。

きまずい沈黙……。

「……ごめん……」

先に謝ったのはヘイタだった。カオルの呆然とした表情が段々と泣きそうな表情になっていくのをすまなく思った。

「こつちこそごめん、あたし、ちよつと言い過ぎた」

カオルは顔を伏せ、そう言った。ヘイタからは前髪に隠れているが、泣いているのかもしれない。

再び、気まずい沈黙……

「……悪いけど……おれ……バイト、あるから……」

「そう……」

どれだけ時間がたっただろうか、たぶん、長く感じられるが、一分もたっていないだろう。

ヘイタが選んだのはとりあえずこの気まずい時間を終わらせてしまふ事だった。

太陽が茜色に燃えていた。カオルはそれを公園のベンチから眺めた。いつもと同じように照りつける太陽に腹が立つ。まるでへこんでいる自分をあざ笑っているかのように思える。

ヘイタが予備校からバイトに出かけた後、そのまま帰る気はせず、ベンチに座って缶コーヒーを飲んでいた。ただし、いつも飲んでるのは砂糖、ミルクたっぷりのやつだが、今は砂糖もミルクも入っていないブラックだ。そういう気分だった。すごく苦い。あまり飲み

慣れていないので、ちびりちびりと飲む。

公園を見回す、そんなに大きな公園でもない、ビルの間に余った土地を余らせておくのももったいなく、申し訳程度に整備した感じだ。閑散としていて、自分以外には誰もいない。

缶コーヒを一口飲み、再び視線を落とす。

ふと視界の端に動く影があった。茂みの中でこちらを伺っている。よく目をこらすと子猫だとわかった。

大きな目、小さい体。耳をピンと立て、こちらを警戒している様子が見て取れる。

カオルはベンチを立ち、子猫を抱こうと手を伸ばした。指を動かして誘ってみるが、子猫は警戒を解こうとはしない。

「ヘイタと喧嘩して、子猫からも嫌われる、か……、これが四面楚歌ってやつね……」

と、苦笑交じりにつぶやく。

しばらく子猫はカオルとにらめっこを続けていたが、緊張にたえられなくなったのか、子猫はカオルの横を通り抜け、走り去った。反射的に目で追う。

子猫は近くにいた少女に走りよった。少女はひざをつき、ポケットから二ボシを取り出すと、子猫に差し出した。子猫は口で受け取る。地面に置いたものを食べるのではなく、直接手からとるところを見ると子猫はその少女にかなり懐いているらしい。

「よかったら、どうです？」

その少女　ナナ　　ははカオルに二ボシを差し出し、そう言った。

「じゃ、お言葉に甘えて」

カオルに二ボシを渡すとナナは子猫を抱いてベンチのほうに連れて行った。カオルもそれについていく。

ナナはベンチの端のほうに腰掛けると、猫を真ん中に下ろした。カオルもベンチに座った。三人がけのベンチで、子猫を挟む。

カオルは、さっきナナからもらった二ボシを子猫の鼻先に差し出す。ナナの時とは違い、しばらく四肢をつっぱったり、二ボシとカオルを交互に見たりと警戒をとかなかったが、そのうち、カオルもナナと同じように安心できる人物だと思ったのか、二ボシを受け取り、食べ始めた。思わずカオルの口元に笑みが浮かぶ。ナナもそれをみて微笑する。

「やっぱりいいですね、猫って」

「そうだね……、実はずっと飼いたかったんだけど、いろいろな事情があつてさ」

子猫は先ほどのまでの警戒心を忘れ、カオルとナナにはさまれて、一心不乱に二ボシを食べている。相当お腹が空いているようだ。よくみると、肋骨が透けてみえるほど痩せている、もしかしたら数日間何も食べていないのかもしれない。

二ボシ一匹はすぐになくなり、子猫はカオルにお代わりを求めるように体を摺り寄せてきた。

「現金だね、君は……」

「それぐらいじゃないと生き残れないですよ、街では」

ナナがカオルにもう一匹二ボシを手渡し、カオルは「ありがとう」とそれを受け取った。

「本来一人で生きている猫を無理矢理連れてきて飼いならし、一時の安らぎを得る、その後、役割が済んだら捨てていく、こつちのほうによっぽど現金だと思いますけど？」

「……まあね……」

子猫は早々に二匹目の二ボシを食べ終わると、子猫はカオルの膝によじ上り始めた。お腹が落ち着いたら今度は遊びたくなったのだろう。胸の辺りでじたばたしている。

「ふふ、結構エッチだね、君。もしかして、男の子かな？」

と、カオルは胸の辺りでジタバタしている子猫を抱き上げ、股の間

を見た、が、付いてない。では、女の子かと思い、いろいろと観察してみる。

「あ、その子、去勢されてるみたいですよ」

カオルはあらためて子猫を観察した。だが、見た目は普通の子猫で、カオルには不自然なところは無いように思える。

「へえ、なんでわかるの？」

「この子、大きさの割りには性格が子供っぽいし、性徴もないみたいです。それに、近くのボランティア団体がお金をだして、野良猫に虚勢手術を受けさせるって言う活動をしてるって聞いたことがあります」

「詳しいんだね」

「毎日こんなことしてますから。役所の人とかに見つかったら、『人を襲って食べ物をとるようになるからやめなさい』って言われるんですけど、人間の都合でこんな住みづらい所にすまなきゃいけないってんだから、ちよつとくらい良い事あってもいいと思いませんか？」

「ん、そんなこと考えたこと無かったけど、そう言われてみればそう思うかも」

カオルは抱き上げていた子猫を膝の上にそつと降ろした。すると、カオルにはもう飽きたのか、走って茂みの中に消えてしまった。

「現金な上に薄情か……」

カオルがつぶやいた。

「その勝手なところが猫っぽくて好きですけど……そのうち戻ってきますよ、たぶん」

「そういうものかあ」

カオルはそう言いながら、立ち上がり、背伸びをした。さきほどまで、子猫がいたから身動きがとれなかったのだ。

「あ、そういうば、ニボシありがとう。お礼にジュースでもおごるよ」

「あ、そういうことなら、ありがたくご馳走になります。もらえる

ものはもらう主義ですから」

「君も現金だね」

そう言つてカオルは微苦笑を浮かべた。

太陽が半分以上沈み、夕方と夜の境目、人を見分けるのが難しくなっている。車が行きかう音が大きくなり、黄色いヘッドライトが太陽の変わりに街を照らす。そんな時間になつても公園にはカオルとナナの二人しかいない。まるで、街から隔離されているようだ。

カオルは缶コーヒー、ナナは缶のミルクティーを飲みながら、しばらく他愛の無い話をしていた。カオルは別にやることも無かつたし、ヘイタとの喧嘩でやる気が無くなつたというのもあり、この名前も知らない少女との話をそれなりに楽しんでいた。

ふと、先ほどの子猫が消えた茂みが音を立てた。何かと二人が目を向けてみる。音を立てたのはさっきの子猫だった。その隣にもう一匹、落ち着いた雰囲気の白猫がいる。子猫と違って首輪をつけているし、毛並みも整っている。おそらくどこかで飼われているのだろう。

「ね？帰つてきたでしょう？」

ナナはそういいながら、白猫に近づき抱き上げた。白猫も暴れたりするそぶりはせず、ナナにされるがままになっている。この猫もずいぶん懐いているようだ。

「この白猫、どこかで飼われてるみたいなんですけど、夜になるとこっそり抜けだしてくるみたいなんですよ」

子猫がテクテクとカオルのほうに歩いていく。その足取りは先ほどと違い堂々としたもので、カオルを少しは信用したのだとわかる。カオルは子猫を抱き上げ、ベンチに座った。子猫は初対面のときの警戒心はどこへいったのやら、自然にカオルに頬ずりをする。カオルが喉をかいてやると目を細め気持ちよさそうな表情をした。

「ねえ、ちよつと愚痴聞いてもらっていい？」

カオルが言った。その言葉は子猫に言ったようでもあり、ナナに対しての言葉のようでもあり、ただの独り言のようでもあった。

カオルは答えを待たずに話を続ける。

「アタシね、今日、喧嘩したんだ」

ナナが白猫を抱き上げ、カオルの隣に座った。

「その相手っていうのが、幼馴染の男友達でね。そいつが今、知らない他人、しかも女と一緒に住んでるんだって」

「知らない他人の女？」

カオルは昼間ヘイタから聞いた話を話した。ナナは白猫の喉を撫でながら黙って聞いていた。

「へえ、その男の人って彼氏さんですか？」

ナナが言った。からかい半分。

「違つて、誰があんなやつ……」

「そういう割には彼氏を他の女に盗られて嫉妬しているみたいに聞こえますよ」

ナナは失礼であろうことを何食わぬ顔で言う。カオルはその態度に少しばかり顔を歪ませたものの、ナナに怒りだすようなことはせず「彼氏……か、そうかもしれないけど、限りなく近くて別のもので感じたと思う……」

と自嘲っぽく言った。

「なんていうか……、たぶん彼氏っていう単語を使わないとしたら、弟っていうのが一番近いかな。なんていうか、ほっとけないんだ。そいつ、今年から一人暮らし始めたんだけど、部屋は片付けないし、健康そっちのけでカップラーメンばかりだしで、押しかけて、部屋片付けさせたり、料理の作り方教えてやったりとかしたりしてね。今日、喧嘩したのも、あいつはバカで覇気がないくせに、正直で人が良いからよく人に騙されそうになったりするから、って忠告したつもりなんだけど……」

「なんていうか、その人、すごい言われようですね……」

「だって、事実だし」

ナナはそれが事実だと言い切ってしまうカオルはその男と本当に親密にあるのだろうな、と思ったが、口には出さなかった。

「自分自身、あいつの事、彼氏だなんて思ったこと無いけど、言われてみれば、嫉妬してるのかもしれない。よくわかんないけど。まあいつだったら『そんなこと考えてもしょうがないよ』って言うんだろうけどね、バカだからさ」

カオルは話をする間、一度も顔を上げず、うつむいて子猫を撫でていた。誰かと話をしたというよりも、独り言を聞いてもらったといったほうが適切かもしれない。

「あつと、ゴメンね、こんなつまらない話聞かせちゃって」

カオルはナナのほうを見て言った。これはちゃんとした返答を期待する言葉だった。

「いえいえ、面白かったですよ」

ナナは立ち上がり、白猫を地面に降ろした。カオルからは逆行で表情が見えないが、さつきと同じような微笑を浮かべているのだろう。

「私、もう行きますね。情が移るとかえってかわいそうですから」
情が移るといふのは猫に対しての言葉だろうか。

「そう、もう遅いしね。それじゃあ、二ボシありがとう」

日は完全に暮れ、おそらくねぐらに帰るであろうカラスがうるさいくらいに鳴いていた。

「いえいえ、どういたしまして」

そう言い、ナナは暗闇に消えた。

「さてと、アタシはどうしようかな……」

あえて口に出して、子猫に向かっていってみる。膝の上の子猫はスヤスヤと寝入っていた。

「動けないじゃん、これじゃあ……」

結局、カオルは子猫が起きるまでそうしているほか無かった。もっとも、そうしてボーっと待っている時間も、カオルにとってそう悪い時間ではなかった。

まな板の上でジャガイモを切っていた包丁が止まった。見るとジヤガイモを押さえている左手から血が出ている。

ヘイタは台所に絆創膏が常備してある絆創膏を取り出し、皮がはげている中指に巻きつけた。見れば、既に何箇所か絆創膏が巻いてあった。

常備しているといっても、料理をし始めた時に何度か使ったくらいで、今では全く使っていない。なのに、今日は久しぶりに絆創膏を使った、しかも何箇所も。

ヘイタは何度目かの苦笑いを漏らすと、再び、ジャガイモを切る。自分の集中力の無さにあきれ半分、あきらめ半分だ。

つついカオルの事を考えてしまう。自分でもよく分からないうちに声を荒げてしまい、喧嘩別れみたいな形になってしまった。どうしたものだろ。と、心の中で思う。

ヘイタのモットーは「やらなくて良いことはやらない」ということだ。今悩んでいることは、考えても考えても、カオルに会って話してみない限りどうしようもない。もっとも、喧嘩別れなどよくあることだから、会えば、どちらからでもどうにでもなる。なのに、毎度毎度、つついという顔で会えばいいかと考えてしまう。

それは人としては普通のこと　よくあること　であるが、ヘイタはそれを嫌っていた。そんなことを考えるのならまず行動で示すべきであり、ウジウジと悩んでいるのはただの逃げだと思えるからだ。

『くだらない……』心のなかで吐き捨て、夕食の支度を続ける。

コンコン

入り口のドアがノックされた。宗教や新聞の勧誘ならドアチャイムを鳴らすはずで、ノックをするのはナナだけである。

鍵が開いていると告げるとナナは「こんばんは」とあがりこんだ。

「何かあつたんですか？」

ヘイタの顔を見るなりナナが尋ねた。

ナナには関係の無いことだから、ヘイタは「別に」と答えたが

「その割りにこの所……」

といって自分の眉間を指差し

「……にシワがすごいですけど？」

と返された。それでも平然としていればいいのだが、ヘイタの場合、その性格からすぐに顔に出てしまう。

「さては女性関係ですか？」

ナナがニヤリと笑いながら聞いた。

「おれに彼女なんていると思う？　ただ、ちょっと友達と口げんかしたただだよ」

「『だけ』って言う割には結構深刻みたいですけど……、私でよければ相談に乗りますよ」

ナナがそう言うと、ヘイタは苦笑し

「いや、大丈夫。つまらない話だし、ナナにはどうしようもない話だから……」

それは確かに事実であつたが、言われたナナはムツときた。拗ねた様子でそっぽを向く。

「どうせわたしはただの記憶喪失娘で、大して役に立ちませんけど、そんな言い方はひどいですよ」

「ごめん、そういうんじゃない、君に話すと単なる愚痴になっちゃうからさ。延々と愚痴られてもうつとうしいだけだよ」

「それでも聞かせてください、気になりますよ」

「それにさ、なんかそういうのって現実から逃げるみたいで嫌いなんだよね、愚痴っても問題が解決するわけじゃないのに、自分の欲求不満を手っ取り早く解消するためだけに相手を不快にするなんて最低だよ、それ」

「……いいです、分かりました。もう聞きません、そういうことなら我方にも策があります」

そういうと、ナナは「では」とヘイタのアパートを出て行った。

「なんだかなあ……」

ヘイタは自分の言葉がナナを怒らせてしまったのだということは理解できたが、追いかけて謝るのもどういうものかと考え、樂觀的に夕食のころには帰ってくるだろうと料理を続けた。

十分後、ヘイタは自分の考えが甘かったことを思い知らされる。

具を鍋に入れて一通りの火を通し、味噌をとき始めたところで再びドアがノックされた。

「こんにちは」

どこか凄みのある顔をしているナナの両手には、大型ペットボトルに入った焼酎が入っていた。

ナナによってマグカップにトクトクと注がれる焼酎。カップの中の製氷皿で作られた氷はほとんど溶けてしまっている。

ロックと水割りの中間系になってしまっているものをヘイタは一口すすり、アルコール度数の高さに顔をしかめる。ビールでさえ厳しいヘイタは焼酎など飲みたくはなかったが、ナナに「飲んでくれないと泣き喚きますよ？」と脅迫され、飲み比べをするはめになった。

ナナとヘイタはちゃぶ台に対面に座っていて、双方の前にはそれぞれマグカップと焼酎の入った大型ペットボトルが置かれている。

「ほらほら、何やってんですか？ さっさと飲んでください」

自分よりもはるかに年下であろう少女にそう言われ、ヘイタは目の前のカップを一息に開ける。ヘイタの視界がグラリと揺れた。目の前にいるナナの顔がぼんやりと歪んで見える。

ヘイタは先ほどのお返しとばかりナナのカップにナミナミと焼酎をついでやる。だが、ナナは水でも飲むかのようにゴクゴクと飲み干した。

「君……、実は人間じゃないだろう……」

「さあ、どうなんでしょうね？　さて、ヘイタさんの番ですよ？」
ヘイタの前にあるボトルもナナの前にあるボトルも同じくらい、
三分の一ほど減っている。大型ペットボトルは四リットル入りなの
で双方一リットル以上飲んでいることになる。

飲んでいる量は同じだが、ヘイタは焦点も定まらず、半ばちゃぶ
台に突っ伏している。一方、ナナは正座を崩さず、余裕の表情だ。
このまま続ければ明らかにヘイタのほうที่痛い目を見るだろう。

「どうです？　話したくなりました？」

ナナは相変わらず笑いながらヘイタのカップに焼酎を注ぐ、まるで
ヘイタがヘロヘロになっているのをあざ笑うかのようだ。少なくとも、
ヘイタにはそう見える。

目の前に注がれた焼酎を虚ろな目で見つめる。頭がボーっとして
体が熱い。気持ちよさと悪さが同居した奇妙な感覚。たぶん、明日
は二日酔いだろうと思う。

「わかった、おれの負けだよ……」

ヘイタはギブアップを宣言する。

酒を持ち出したナナに対して、年上のメンツを立てようと意地にな
ってしまったのをヘイタはつくづく悔やんだ。

「じゃ、話してくれるんですね？」

ナナは身を乗り出して頼杖をつき、興味津々な様子でヘイタを見た。
まるでゴシップをこよなく愛し、井戸端会議で「ここだけの話」を
楽しむオバサンそのものだ。

「ただ、予備校で友達と喧嘩しただけだよ」

「喧嘩の原因とかは？」

ヘイタは理由を話していいものか少し踏みとどまったが、アルコー
ルに後押しされ、話した。

「いいにくいんだけどさ、君なんだ」

「というと？」

「飲んだ帰りに、家出娘に助けられてそのまま泊めることになった

って言ったらいきなり怒りだして、売り言葉に買い言葉ってやつでコツチも言葉が強めになっちゃって、口喧嘩になった」

ナナの中でヘイタと昼間公園で会った女の人　カオル　がつながった。そもそも、いきなり異性が自宅に寝泊りすることになるなどというシチュエーションはそうそうあるわけではない。それにタイミングも同じである、関連付けて考えるのが自然だろう。

ナナは知らなかったとはいえ、男女の仲をかき回したことになる。「……その友達って……女性ですよね？」
すまない気持ちと後ろめたさから、声が自然と小さく弱々しくなった。

「まあ、一応そうだけど？」

「ごめんなさい、私のせいで彼女さんと喧嘩させてしまっ……、まるで泥棒みたいに……」

ところが、ヘイタは首を大きくブンブンと降り、きっぱりと「ちょっと待てよ、彼女じゃないよ。あくまで友達。幼馴染で、たぶん、親友と呼んでもいいと思うけど、彼女なんかじゃない」と、否定した。

『あの女性とヘイタってどれくらいの関係にあるんだろう』

ナナは二人に悪いとは思ったが、好奇心に勝つことはできず、疑問に思ったところを確かめることにしようと思った。ひょっとしてちよつとした嫉妬心も手伝って、そう思ったのかもしれない。

「その人ってどんな人なんですか？」

ヘイタは「うーん」と、突っ伏しながら考えるそぶりを見せた後、答えた。

「小学校から高校卒業までなぜかずっと同じ学校でさ、大学もなぜか同じところを志望してたんだけど、おれは落ちちゃったから予備校と大学に分かれちゃって。それまで毎日会って、変な話ばかりしてたなあ」

ヘイタは、アルコールのおかげで口が軽くなり、ナナへの悪い意味の遠慮が無くなっていた。普段はあまりしない話もテンポよく口か

ら出てくる。

「カオルが……、あ、そいつの名前、カオルっていうんだけどね。誰だったかに二股かけられたときなんか、散々文句言われたなあ、理不尽でさ、二股駆けたやつじゃなくておれに文句言うんだ。で、最近もたまに飲みに誘われるんだけど、すぐ理不尽な事いうんだよ、なんで浪人したんだ、とかね。浪人したものはしたんだからしようがないじゃん、聞きたいのはこっちだよ」

そう言っただけは「まったくもう」とばかりため息を一つ吐いた。

「でも不思議と嫌いじゃなくて。まあ、良くも悪くも単純なやつだから、裏表が無くて付き合やすいしね」

「へえ、で今日ってどんな感じに喧嘩になったんですか？」

「あ、そうだね、話がずれた」

ヘイタは少しばかり考えるそぶりを見せ、再び話始めた。

「なんか、話の種に君がウチに居候……っていうのかな？　しはじめた事情を説明したら、記憶喪失なんて信じられない、そんなウソつき放っておけ。とか言われて、おれにも体目当てなんでしょう？」

とか……そんな事言われて、俺が悪口いわれるのはともかく、記憶喪失で困ってる人がいるのにつて……」

「へえ。っていうか、それはカオルさんの反応が普通ですよ」

「って？　どういうこと」

「私が言うのもなんですけど、ヘイタさんはすぐに人を信用しすぎです。普通、記憶喪失って言われて素直に信じませんよ。失踪した人が警察に届けられるのが嫌で記憶喪失を騙るっていうのはよくある話ですから」

そういうと、ヘイタは思わず苦笑いをもらした。言っていることがカオルと同じだったからだ。

「あはは、カオルにも同じこと言われたよ。お前は貧乏くじを引きすぎだつてね……、でナナちゃんのはホントに記憶喪失なんだよね、一応確かめてみるけど」

ナナは肯定とも否定とも取れる微笑とともに「さあ、どうでしょう」と答えた。

「でも、人を見たらウソつきだと思えていうのは、ちょっと悲しいことだと思わない？」

「人を見たら泥棒と思えじゃないんですか？」

「ウソつきは泥棒の始まりともいうだろ、だったら二つあわせてそうなるでしょ。」

ナナは「まあ確かに」と肯定した。

「そんなこと言ったら普通に生きていけないよ。例えばニュース番組だつてさウチらが見ててウソかホントか確かめる方法は無いじゃん、結局は鵜呑みにするしかない。歴史の教科書だつて、数学だつて、考えてもホントかどうか分からない。だったらホントのことだと思つたほうが疑うよりも労力が少なくてすむだろ？」

酔っ払いの理屈だなあ　とナナは苦笑した。でも全て間違っているとはいえない気がした。

「本当にヘイタさんって合理主義者なんですね」

「合理主義者ってほどでもないけど、ただ単に無駄なことが嫌いなだけだよ、誰だつてそうでしょ？」

「そうでもないですよ、たぶん。特に私とか」

「そう？ま、人それぞれ、三者三様。別にいいけどね」

「で、カオルさんなんですけど」

「あ、そういえばそんな話だったっけ」

「たぶん、ヘイタさんの性格わかってくれてますよ。もしかして次会う頃にはそんなことで喧嘩したのも忘れてたりして」

ナナは、夕方、猫を抱いていたカオルの表情を思い出して言った。「たぶんそうだとは思っただけだね、喧嘩したのも一回や二回じゃないから。でも、いつも無意味に悩む。次はちゃんと会えるか、このまま二度と同じ関係に戻れないんじゃないかって、そんなこと考えるんだつたらさっさと電話でもして謝ればいいのに。悩んだつてただの現実逃避でしかないのにさ」

「たぶん、それがヘイタさんにとって大事で重要なことだから、慎重で臆病になっちゃうんですよ。どうでもいいことだったら最初から悩んだりしないでしょ？ 重要なことを時間かけて考えるのは当たり前ですよ」

「そういう考え方もいいのかな」

そう言ってヘイタはカップ一杯の焼酎を開けた。焼酎に慣れたのか飲みすぎて味が分からなくなったのか、なかなか堂に入った飲み方だった。だが、飲んだ後で体がグラリとゆれ、再びちゃぶ台に突っ伏し、「ふい〜」と息を継いだ。目は半目で体に力が入っていないのが見て分かる。そろそろ限界のようだ。

ナナは席を立ち、ヘイタの後ろに適当に布団を敷き、ゆつくりと寝かせてやる。ゴロンと横向きに寝転がったヘイタの寝顔はしこたま飲んだ割にはスツキリしていた。

「無意味、無意味って言わないでくださいよ、たぶん、この世界に意味のあることなんてそんなに無いんですから」

ナナがぼんやりとヘイタの顔をみながら呟いた。ヘイタが聞いている、いないは関係無い独り言のようだった。

ベッドから毛布を引っ張りだし、ヘイタに掛ける。秋とか冬とかではないから、毛布だけでも風邪を引いたりはしないだろう。

ナナはしばらくヘイタの寝顔を見つめた。呼吸が完全に落ち着いた寝息に変わったころ、意を決し、カオルに悪いと思いながらもヘイタの毛布に潜り込んだ。今日で最後にしよう、最後だからちょっとくらいオマケしてくれてもいいだろう、そう言い訳をする。

「……暖かい……」

生き物は暖かい、当然のことだ。だが、ナナにとってその暖かさは一度背を向けたものであり、自己のなかで敵とみなしたものだ。た。

長い間忘れていた。いや、忘れようとしていただけなのかもしれない。独りで生きようと思った。でもできなかった。自分が「シイナ・ナナ」になった時に全てを捨てることができたと思ったのに

……。

『寒い』

カオルはそう感じた。

独り、布団に丸くなると時々思い出す、前の男にフラれた時を。すごくいきなりだったことを覚えている。学校からの帰り道、いきなり「ゴメン」と切り出された。向こうの理由は……確か、束縛されるのが嫌、好きな人ができた……たぶん、このどちらか、両方だったかもしれない。

理由はどうでもよかった、ただ、その日から当たり前になっただけで、日常が崩れた。

いつも、アイツに話を聞いてもらっていた、それが無くなっただけで、日常が乾ききってしまった。誰にも話せないことがたまった、同性への愚痴など、女友達にはできなかった。彼女たちは口が軽い、自分のいないところで自分もまた、同じように話されていると考え、男性にしか話せない事だった。

そのとき、アイツの代わりになってもらったのがヘイタだった。幼馴染ということ以前から仲がよく、ヘイタだけには何でも話せた。また、ヘイタはいつだってカオルのそばにいた。

それが高校を卒業したらまた、日常が壊れてしまった。落第したヘイタと合格したカオル、毎日、あつて話して……わざわざ会わなくちゃもう会えなくなった。

いつからこんなに寂しがり屋になったのだろうか。これではまるで彼氏に甘えたがる女のような。今日も今日で、なんであんなことを言ってしまったのだろう。

「……あゝあ……」

ため息をつきながら寝転がり、天井を見上げた。見慣れた景色のはずだが、やけに高く思える。

そのまま呆と天井を見る。体の力を抜く。脱力。からだは床と張り付くような錯覚を覚える。

五分ほどそうしていた。何もしない五分というのは割と長いものだ。

「……よしッ！」

少しばかり気合を込め、体を起こす。

頭の中でいくら考えても終わらない。それだったら今、さっさとヘイタのところに謝りに行って、この事件に決着をつけたほうが早い。

天井を見つめた五分は、その覚悟を決めるための時間だった。

踏み切ったからには二の足は踏まない。中途半端に止まっても仕方が無い。

部屋の隅に投げ出してあった衣服を適当に身につけ、手串で髪を整える。鏡で確認、適当にやったにしてはまあまあだろう。

カオルはそのまま携帯と財布をポケットにねじ入れて、アパートを飛び出した。

ナナはおもむろに毛布から這い出した。

相変わらずヘイタはグッスリと眠っている。よほど焼酎が効いているらしい。あれだけ飲んだのだ、だれだってそうなるだろう。ナナがヘイタの様になっていないのは、ナナのほうのボトルの中身を、あらかじめただの水にすり替えていたからだ。

「水と焼酎で飲み比べするなんてね。ちょっと、間が抜けすぎかな。ホントに『疑う』って事を覚えたほうがいいんじゃない？」

聞こえないとは思いつながらナナはそう言った。なんとなく言わないで出て行くのはウソをつくようで嫌だったからだ。もっとも、ただの自己満足だとは自覚していたが。

荷物は昼間のうちにまとめておいた。気ままな放浪生活だ。元々

そんな大した荷物はない、着替え一式とヘイタからくすねた二ボシが少々、プラス、それを入れるナップサックだけだ。

ナップサックを肩にかけ、ヘイタに掛けた毛布を直してやる。あ、寝顔、可愛いななどと思ったりする。

「それじゃあ」

そう言い、入り口のドアに向かった。靴を履く。なんとなく靴紐を結びなおしてみた。右、左と結びなおした。なんとなく気に入らなかったのでもう一回結び直そうと靴紐を解いたところで、外側からドアノブが回った。

開いたドアの向こうにいたのはナナが昼間公園で会った女　カオルだった。

少しの沈黙が流れた。

双方呆然としている中、先に口を開いたのはナナだった。

「……どもです」

「……まさか君が……」

「はい」

ナナのいつもの微笑を、カオルは幾分強ばった笑みで返した。ヘイタを騙して居候している女。そのイメージと実際のナナとのギャップがカオルの心情を複雑なものにしていた。

「なんか、いろいろとご迷惑をお掛けしました。私のせいで二人を喧嘩させてしまったみたいで……、すいませんでした」

ナナはペコリと頭を下げて言った。

「そんなに謝らないでよ、ヒステリーおこして怒鳴ったあたしがバカみたいじゃない。実際、バカな事したなって思ってるけどさ」

カオルは苦笑した。

「で、ちょっとお願いなんですけど、ヘイタさんが起きたら、いろいろ迷惑かけてごめんなさい、って伝えてもらえませんか？」

「そういう言葉、自分で伝えようよ」

「それはちよつと……、私、今からまた、漂流しようと思ってるんです。ヘイタさんの顔をみたらもつとここに居たくなっちゃうんで」

「出て行くって……、出て行って明日からの生活にアテはあるの？どこに泊まるの？何を食べるの？」

カオルの言葉は家出しようとする娘を心配する母親のそれだった。

「今まで、一年くらいこんな生活してきましたから、それにカオルさんが心配するほど私、子供じゃないんですよ」

「子供はみんなそう言っんじゃないの？」

ナナは力なく笑い

「そうかもしれないね」

と曖昧に答えた。

「そうだとしても、なんでそんな放浪の真似ごとしてるの？　つらくないの？」

「だれだつて名前も過去も何もかも捨てたい時つてあると思うんです。わたしはそれをやっているだけです」

「それにしたつて、いつまでもそんな生活しててもしょうがないじゃない」

「いいじゃないですか、私がどうなろうと貴女には関係ないことなんですから。それに私のこと何も知らないくせにわかったような事言わないでください」

表情は穏やかといつていいモノだったが、口調、言葉から断固とした離別の意思が感じられた。

「ごめん」

「……だから、貴女に謝られたらこちらの立場がないじゃないですか……、かき回してるのはこっちなんだから……」

ナナはそう呟き、ヘイタのアパートを出る。入り口で言葉を失っているカオルに背を向ける位置まで進んだ。

「それじゃあ。……公園での時間は結構楽しい時間でしたよ」

そついい残し、ナナは夜の静寂に消えていった。

カオルはそれを追いかけることはできなかった。

ヘイタの視界にぼんやりとした天井が見えた。照明は着いておらず、薄暗い。体には毛布が掛けられているのがわかる。ナナが掛けてくれたのだろうと思う。視界がゆれる、頭痛い。飲みすぎた。

「やあ」

知っている声がする。やたらと重たい体を起こす。声の主はカオルだった。暗くて顔がよく見えないが、なんとなくわかった。

「なんでお前がここに？」

「ん、昼間のこと謝りに来た」

「だからってこんな時間に……」

「ヘイタだからいいかなって。昼間はゴメン、あたし、どうかしてた」

「いや、おれも。なんか、売り言葉に買い言葉ってやつでさ」

喧嘩はそれで終わったした。もしかしたら、既に終わっていたのかもしれない。やってみれば簡単なものだった。

「大分飲んだみたいだね」

「うん、ナナと勝負してたんだ。あの子、お酒強くてさ。コッチが先につぶれた」

そういえば、部屋の中にナナの姿が無い。起きて出かけるには早すぎる時間だし、今日は酔っているはずだ、おいそれと外出できないはずだ。

「さっきまでそこで飲んでたはずなんだけど、中学生くらいの女の子知らない？」

「その子ならさっき出て行ったよ」

「出て行ったって？」

「当てのない旅ってやつを続けるみたい、これまでもずっとそんな感じで生活してるって言うてた」

「なんだって突然そんな事、酔っ払ってるときに」

「彼女、全然酔ってるようには見えなかったよ」

「そんなわけないよ。少なくとも、おれと同じ量飲んだんだから、顔に出なくてもそれなりに酔ってるはずだ」

そこまで言うとはイタはアルコールでフラフラな体を無理やり起こし、入り口のほうに向かおうとした。当然、足取りもおぼつかず、危なっかしいことこの上ない。だが、それでもなんとか前に進もうと懸命だ。

数歩進んだところでバランスを崩し、転倒しそうになった。あわててカオルが肩を貸し、それを防ぐ。

「ちよつと！どこいくの!？」

「ナナを探しに行くんだ。出て行くなんて酔っ払った末のたわ言だろ？きつとそこらへんで横になってるに決まってる、外で夜明かしなんてしたら体に悪いだろ」

「だから、全然酔ってなかったって。それに、あの子は……」

少しのためらい

「あの子はヘイタが追いかけてくるのを望まないと思うよ？」

その先は事実を変えて伝えた。

「そんなのもし本人が酔ってないって言うってても、実際酔ってたかもしれないし、おれの行為が望まれないとしてもなんで望まないか聞く権利くらいあるよ」

『この酔っ払いが……』カオルは心の中で頭を抱えた。完全に酔っ払いの理屈である。この分だとさっきナナと話したことを説明しようとしてもまともに聞いてくれないだろう。

だが、一理あると思うのはカオルの考え方がおかしいのだろうか。ナナは独りを望んでいるのは確かなことなのか、彼女の立場になつて考える。私はアイツに振られたとき一人になった。でも、ヘイタがいるから一人じゃなくなった。誰かがいる、それはつらいことだったか。むしろ心地よかったのではないか。では、どうしてナナは独りになりたがるのか。

もしも自分がナナなら　ナナに何があつたかはわからないけれど　どう思うだろうか。それは何通りでも答えが出せる、できの悪い試験問題のようなものだ。得た答えは自分だけしか納得させられないかもしれない。常識的に間違っているかもしれない。だが、自分のなかではそれが正解だと思うのだ。他人はとりあえず関係ない。それをそのまま解答欄に書いてみるしかない。

「ヘイタ！いいよ、ここでおとなしく寝てて、わたしが探しに行く」カオルはヘイタを押しのとけると、アパートを飛び出した。ナナの行き先は心当たりがあつた。

公園のベンチに寝転がり、する事もないのでなんとなく夜空を見上げる。高層ビルに切り取られた夜空、それでも星は綺麗だ。シイナ・ナナになつて何度空を見上げただろうか。

まだ春だということにとても寒い、冬空よりも寒い気がする。

「！」

それはいきなりだった。ナナの腹部、みぞおちの辺りに衝撃が走った。

何事かと思い見てみれば、昼間の子猫がナナのおなかの上で『なにやってんだよう』とでもいいたそうに座っていた。ボーっとしている間に飛び乗ってきたらしい。

ナナは「やあ」と一声かけると、再び夜空を見上げる。子猫はナナの体温が心地いいのか、腹部の上で丸くなり、額をこすりつけてナナに甘えている。

「あつたかい……」

子猫ののどを撫でてやりながらそう感じた。その暖かさを確かめたくて、子猫の背中を抱く。自然とまぶたが閉じていった。そのまま眠ってしまいそうだった。

……

どのくらいそうしていただろうか、あるいは眠ってしまったのかもしれない。不意に頬に暖かいものを感じた。なんだろうと薄目を開けると、カオルが立っている。頬のぬくもりはホットのミルクティーだった。カオルは昼間の別れ際のようにスツキリとした笑顔を湛えていた。

ナナはその笑顔が多少癪に障ったが、いつもの笑顔を貼り付けると、「ありがとうございます」と礼を言い、ミルクティーを受け取った。だが、受け取っただけで、起き上がりもせず、プルタブを開けもしなかった。

カオルはナナの隣に座ると自分の分のホットココアを開けた。一口飲む。

「あ、ミルクティーは嫌いだった？」

「何か御用でしょうか？一応、分かれるときに一応の感情を伝えたくもりなんですけど」

ナナはカオルの顔ではなく、夜空を眺めながら言った。

「ん、あなたは別れたつもりでも、こっちはそうじゃないから」

「自分勝手な理屈ですね」

「あなたもね」

カオルはニヤリと笑った。ナナも同じように笑った。

「言われてみれば、確かにそうですね。自分勝手なのは私のほうです」

「でも、実際にこっちも自分勝手行動してるって自覚はあるから別にそのことを攻めようっていうのじゃないよ。人間ってやっぱり自分勝手なものだし」

カオルはそこで一旦言葉を切り、少し表情を引き締めた。

「ただ、勝手をやるならやるなりに説明をして欲しいの。例えば、なんでいきなり出て行こうとするの？とか、結局あなたは何をしているの？とか、記憶喪失っていうのもたぶん、ウソなんですよ？失踪する時によく使われる上等手段だもの」

「やっぱりわかりますか？」

「そんなのを黙って信じるなんてヘイタくらいだよ」
ナナはしばらく考えた末、渋々と「しょうがないですね」と夜空に向かつて独白するように語り始めた。

「ホント、つまなくて、どうでもよくて、恥ずかしい話なんですけどね……どこから話しましょうか　バカみたいな話なんですよ、実際。付き合ってた人と別れて、その過程に疲れた。それだけの事なんですよ」

ナナは一度言葉を切り、カオルの方を向いた。

「私、いくつくらいに見えますか？」

「何？唐突だね」

身の上話とはぜんぜん関係の無い話である。が、「いいから答えて」と促すナナにカオルは「中学生くらいかな」と答えた。

「そうですね、それくらいですよね」

「それがどうしたの」

「私、本当はハタチ超えてるんですよ」

カオルにとってその話には信じがたかった。どこからどう見ても、中学生にはみえない。低い身長、起伏が無く、丸みの無い、少年の体つき。下手をすると小学生にでも間違われそうだ。

「冗談でしょ？」

「それが、ホントなんです、なんなら高校数学でも解いて見せましょうか？」

ナナの言葉は冗談めかしたものだだったが、そこまで言うのだから本当の事なのだろう。

「医者は原因不明のホルモンバランスの異常って言っていました。うまく女性ホルモンが生成されなくて性徴が中途半端になってしまった、ということらしいです。まあ、原因は不明って話ですけど、環境ホルモンとかありますから、別に不思議なことじゃないんですよ」

うね」

カオルはナナの告白を黙って聞いている。「外見だけなら童顔のちよっと行き過ぎたものだと思えばいいんですけど、私、そのせいで子供できないんです。私は生物として出来損ないの欠陥品なんですよ」

ナナは子猫を悲しそうに、愛しそうに抱いている。虚勢された子猫を。

「私がそれを知ったのは好きだった人に告白して、進展している真っ最中でした。私は彼のことが本当に好きでした。だから、出来損ないの私のために彼の人生を狂わせなくなかった。だから、失踪届けを書き、記憶も過去も人格も捨てて私はナナになりました」

ナナはまるで人事のようにとつとつと語る。それは完全に想いを取り去った結果なのか、それとも未だ想いを引きずっているのか。

「でも、捨て切れなかったんですよ。ヘイタさんの所に居候してるうちに、その生活を続けたい自分に気づいたんです」

カオルは、思わず心の中で思わず苦笑した。カオルも捨てたつもりで捨てていけないものがあつた。昔の男に振られた時、

「もう二度と男と付き合うものか」と思ったが、ヘイタと恋人に近いやりとりをしている。

矛盾だ。男とは決別した自分、でもヘイタに少なからず惹かれている自分。ナナもカオルと同じパラドックスを抱えている。

カオルのパラドックスはまだ解消されていない。だが……

「ホント全部捨てたつもりだったのに、頭悪いです、私」

ナナは子猫を抱き、ベンチの上にうずくまる。子猫は気持ちよく寝てたところをナナの都合で起こされたことで多少気分を害したようだが、おとなしくナナに抱かれている。

ナナの話はそこで途切れた、一通り話しは終わった。間の悪い沈黙が二人と一匹に流れる……かと思われたが

「ホント、バカだよ」

「え!？」

「わたしも、君もね」

馬鹿呼ばわりされたナナは、いきなりすぎて怒りよりも、困惑のほうが大きいような表情をした。

「自分で勝手に考えて、自分で勝手に矛盾抱えて、勝手に苦しんでる。そんなに自傷自縛が好きなのかな」

カオルは笑っていた。その笑いは自分自身を笑うものだろうか。

「その子猫、去勢されてるらしいけどさ、人とか猫と付き合うときに子供できるできないとか、できそこないとかって考えてると思う？」

子猫は相変わらず、ナナに抱かれて能天気眠っている。その眠りは安らかだった。

「そんな事、考えたって状況は変わらないじゃない。だったら、考えないで能天気にやったほうが得だよ」

カオルはそう言いながら、ヘイタのことを思い出した。受験に落ちても能天気に笑っていたヘイタ。その能天気さが腹立たしく、いらだつたものだが、今は、少し、ほんの少しだけ、かつこよく見える。「そんな矛盾とかなんだの考えてないで、ヘイタがいいならヘイタにくつついていればいいのよ、そっちのほうが自分にとっていいのならね。わたしはこれからそうするよ、だってそれが自分の望みだもん、自分の気持ちにウソはつかない、後悔はしたくないから」

「くだらないですよ、そんなの」

ナナの表情は暗闇でわからなかったし、声のトーンは変わらないものだったが、その台詞はカオルに対しての明らかな批判の情を表していた。

「自分の考え押し付けるだけ押し付けて、自分に酔って気持ちよくならないでください。そんなの大きなお世話ってやつです。それに年下のクセにえらそうなこと言わないでください。自分の過ごした年月が無駄になってるみたいでムカツキます」

ナナはうつむいていた顔をゆっくりとあげる。その表情は笑いながら怒っているという器用な表情だった。

「もう頭にきました。潰します。完全に跡形残らず、再起不能になるまで」

ナナはそう言っ、立ち上がり、子猫を地面に放した。

ホントはナナ自身、気づいていたのかもしれない。ただ、きつかけが無かったとか、自分の気持ちがわからなくて困惑していただけかもしれない。でも、それはあくまで「かもしれない」話だ。本当の事はわからない。だったら、今、自分でやりたいと思った事をやろう。たぶん、それが、今の自分の中での真実だから。

「ヘイタさんのところで、ガチンコで、朝まで飲みましょう」
カオルはフンと鼻を鳴らし、「望むところよ」とはき捨てた。

やたらと太陽がまぶしく、部屋が暖かい。もう昼を回っているのだろうか。

「頭痛い、だれですか？　こんなになるまで飲もうっていった人」
ヘイタのアパート、ちゃぶ台は天板がみえない。ブランデー、リキユール、日本酒、まさにカオスだ。

「アンタでしょ！　あゝあゝ、自分の声が頭に響く……」

床にヘイタ、カオル、ナナが絡まって転がっていた。三人ともうめき声を発し、まるでゾンビのようにはいずりまわっている。

頭痛と吐き気にナナは地獄のような苦しみを感じる。そのくせ、唇は笑みの形に歪んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4696d/>

自分勝手にin my life

2011年1月24日21時45分発行